

特集

中小病院は生き残れるか

現在のわが国の医療機関は、高度先端医療を担う総合病院と外来診療や在宅医療サービスを提供する診療所への2極化が進んでいる。医療費の削減、経営重視という流れの中、病床削減の主な標的となってきたのは地域の中小病院であり、あらゆる面で中小病院を取り巻く経営環境は極めて厳しいものとなっている。しかし一方でこれまで日本の地域医療を支えてきたのは多くは中小病院であり、地域の中小病院なくして日本の地域医療は守れないことも事実である。

中小病院には地域医療においてこういった役割を求められているのであろうか？ そのために中小病院にはこういった改善が必要なのだろうか？ 地域医療を維持するためにこういった政策の変更が望まれるのだろうか？

本特集では地域のニーズを見極め、中小病院だからこそなし得た模範的な病院運営の実例が数多く示されている。そこでは地域と離れた高次医療機関では提供しにくいサービス、すなわち高齢者の終末期医療、対応困難な認知症患者の受け入れ、また現在の診療所機能では十分カバーされていない分野、いわゆる一次救急(軽症患者、かかりつけ患者の時間外24時間対応)、入院を必要とする分娩や外傷等に関わる一般的手術など、これまで一次医療、三次医療が積極的に取り組んでこなかったサービスにその活路を見いだしている。

医療資源は限られている。数少ない医療資源を最大限に有効に活用するためには、医療機関が互いに競合するのではなく、地域の中でそれぞれの実力を知り、病院単位ではなく地域単位で完結するような連携の仕組みが必要である。中小病院は地域包括ケア拠点として地域の診療所、在宅医療、介護施設の連携の要であり、外に対して高次医療機関との連携の窓口でもある。地域住民に対して個々に独立してサービス提供するのではなく、お互いに限られた資源を有効に活用し、地域の医療者と住民との信頼関係を育むことも忘れてはならない。また同時にこれからの地域医療を担う若い世代が地域医療を学ぶ場、研修の場としても中小病院は欠かせない。

現在最も厳しい経営環境にある中小病院が生き残る活路は、実はこれまで医療サービス全体が軽視してきた分野、地域住民のニーズに必ずしも応えてこなかった分野にあると言ってもよいかもしれない。中小病院が生き残ることが、医療サービス全体の仕組みを大きく変革する原動力となり、中小病院が変革の旗手となることに期待したい。

山田 隆司

台東区立台東病院管理者・院長